

2年次の実践・研究の成果と課題

研究委員長 鈴木 聡

1年次の実践・研究では、よりよい問題解決のために見通しや手応えをもちながら学びを進める姿が見られた。しかしながら、必然性をもって自らの学びを見つめ直し、深めていく点において課題が残った。こうした成果と課題を踏まえ、2年次では次のように重点を設定し実践・研究に取り組んだ。

重点 「学びのものさし」を更新するための手立て

2年次は、学びの過程で生み出した「学びのものさし」を更新しながら、自らの学びを深めていく子どもの姿を引き出すための手立ての具体化に取り組んだ。また、子どもが「学びのものさし」を更新し、学びを深めている姿について、教科等の専門的な見地から豊かに見取り、その価値を認めることを目指した。

ここでは各教科等部の実践から得られた知見をもとに、2年次の成果と課題について述べる。

1 成果

(1) 自分事として問題解決に向かう姿を引き出す支援

①一人一人が問題解決に向けて選択・決定できる活動の設定

一人一人の興味・関心に応じて、選択・決定できる活動を設定したことにより、自らの興味・関心に応じて、教材や素材、立場、表現方法などを選択・決定し、問題解決を自分事として追究する姿が見られた。例えば、次のような姿である。

- ・国語科の登場人物の性格を深く理解するために、複数の教材文から一つを選択し、文中の根拠を探しながら物語全体を熱心に読み込む姿。
- ・社会科の学習問題に対する立場を複数の中から選択し、結論と根拠のつながりを説明する姿。
- ・算数科の身の回りから素材を選択し、具体物を操作したり対象について説明したりする姿。
- ・図画工作科の絞られたテーマの様子を表現するために、偶然できた模様を自由に見立て、自分なりに想像や表現を広げる姿。
- ・道徳科の議論のテーマの立場を選択し、登場人物という他者の体を借りてテーマについて自分の言葉を語る姿。

このように、自らの興味・関心に応じて、教材や素材、立場、表現方法などを選択・決定し、問題解決を自分事として追究する姿が見られた。



②自分にとってのモデルの発見につながる場づくり

思考や表現など自分にとっての学びのモデルの発見につながる場づくりを工夫したことにより、モデルの思考や表現のよさを取り入れ、自ら学びの質を高める姿が見られた。例えば、次のような姿である。

- ・音楽科のゲストティーチャーの歌声を体感したことにより、音楽活動の目指し

たい具体的な目標を描き、耳や体で感じ取った音を目指そうと試行錯誤する姿。
・体育科の器械運動において、グループ内で技の出来映えを比較し合い、得意としている子どもの動きから見付けたコツを基に、出来映えを高める姿。

・生活科の身近な自然を使ったおもちゃづくりにおいて、同じ活動をする子ども同士が自然に近くで活動することにより、周りの友達から遊びや遊びに使う物をよりよくする手掛かりをつかんだり、互いの考えや遊びをつなげ、学びや活動を発展させたりする姿。

このように、モデルの思考や表現のよさを取り入れ、自ら学びの質を高める姿が見られた。



(2) 必然性を伴った学びの見つめ直しを促す支援

① 比較につなげるための思考や表現の可視化

思考ツールや動画を用いて思考や表現を可視化し、比較につなげたことにより、一度立ち止まって自らの学びを見つめ直し、思考を深めたり表現を豊かにしたりする姿が見られた。例えば、次のような姿である。

- ・社会科のトゥールミン図式などの思考ツールを用いた情報交換をきっかけに、友達の説明が自分の説明の不十分な点を補強することに気付き、考えを結び付ける姿。
- ・生活科のウェビング法により自分と友達の考えが結ばれたことで、「つながって嬉しい」と仲間と考えがつながる楽しさを実感する姿。
- ・体育科のタイムシフトカメラで自分の動きを振り返ったことをきっかけに、技のつまずきに気付き、モデルに近付くためにはどのような点を意識すればよいか友達に助言を求める姿。
- ・特別活動の「納得度メーター」を用いて話し合いについての納得度の割合を可視化することをきっかけに、互いに譲歩したり妥協したりしながら考えをすり合わせながら話し合い、よりよい合意形成を目指す姿。
- ・総合の活動や作品を互いに評価し合うことをきっかけに、自他の考え方や感じ方のずれに気付き、指摘に対する解決策を考えたり自分たちの考えを更に深めたりする姿。

このように、思考や表現の比較をきっかけに、一度立ち止まって自らの学びを見つめ直し、思考を深めたり表現を豊かにしたりする姿が見られた。



② 協働的な省察が生まれるしかけ

日常生活の事象を教科等の視点から捉え問題解決する活動やゲーミフィケーションを取り入れた活動を設定したことにより、自発的に自らの発見や考えを仲間へ伝えたり、必要感をもって仲間と情報共有し、問題解決したりする姿が見られた。例えば、次のような姿である。

- ・算数科の生活の事象を算数の視点で捉え、問題解決に取り組んだことにより、自分が発見したことや考えたことを友達に教えようと、自然にペアやグループで情報交換する姿。

- ・家庭科の今まで知っていたつもりは本当に正しいのかという思考を基に課題を設定したことにより、友達との意見交流を通して、和食における出汁の役割について確かめ合う姿。
- ・理科の日常生活から見いだした疑問を基に学習問題を設定したことにより、学校や家庭での実験結果を友達に紹介したり、友達の発見を自分でも科学的に解明しようとしたりする姿。
- ・外国語科のゲーミフィケーションを取り入れた活動において、貿易ゲームでの交渉を成立させるために、言い換えをしたり動作を加えたりするなどあらゆる表現を駆使して伝え合う姿。



このように、自発的に自らの発見や考えを仲間に伝えたり、必要感をもって仲間と情報共有し、問題解決したりする姿が見られた。

2 課題

一人一人がよりよい問題解決に向けて学び進めるための授業デザイン

2年次の実践・研究を通して、自らの学びに手応えや愛着をもち、自分事として問題解決に向かう姿や問題解決の過程で自分なりに「学びのものさし」を更新している姿が見られた。しかし、その「学びのものさし」を更新する姿をさらに全体に広げ、一人一人が切実感をもって自らの学び見つめ直し、よりよい問題解決に向けて学び進める自律した場面を広げることが課題である。そこで、一人一人が切実感をもって自らの学びを見つめ直し、よりよい問題解決に向けて選択・決定したり試行錯誤したりしながら、学び進めていくことのできる授業デザインを具体化していく必要がある。